

東北地方北部御所野遺跡における縄文時代以降の集落生態系史

village ecosystem history since the Jomon Age at the Goshono site,
northern Tohoku district

学籍番号 47-116759
氏名 山本 総光 (Yamamoto, Fusamitsu)
指導教員 辻 誠一郎 教授

1. 背景と目的

日本が世界有数の森林国であることはよく知られているが、かつて日本には広大な草地が広がっていた。今でこそ九州阿蘇などの一部地域でしか見られないが、かつて草地は日本の農村景観の大きな構成要素であった。温暖湿潤な気候である日本において、極相は森林である。そのため草地が形成・維持されるためには人間による自然への干渉が不可欠となる。つまり、草地における生態系は人間が森林を切り開き、作り替えた人為生態系であるといえる。人為生態系は草地だけではなく、居住域をはじめ、木材資源利用のための林地や狩猟・採取のための空間などにも形成される。そうした人為生態系を包括するのが集落生態系である。集落生態系とは集住域と集住する人々の生活を支えている生業の基盤となっている空間のことであり(辻, 2011)、これを解明することはその文化の特徴を解明することに繋がる。これまでは三内丸山遺跡や青谷上寺地遺跡などでその集落生態系の復原が試みられてきたが(辻, 2011, 2012)、まだその事例は少ないのが現状である。そこで本研究では、縄文時代以降、歴史時代においても集落の存在が確認されている御所野

遺跡に焦点を当て、人の居住と活動が生態系をどのように変えたのか。また、そうした人為生態系を包括する集落生態系がどのようなものであったかを明らかにすることを目的としている。この目的のために、本研究では植物珪酸体分析を用いた。

2. 御所野遺跡概要と調査地点

御所野遺跡は岩手県一戸町を流れる馬淵川の東岸、東西方向に細長く突き出た台地上に広がる、縄文時代中期後半(約 4,500~4,000 年前)を主とする大規模な集落遺跡である(図 1)。集住域は主に西、中央、東の三つに分けられ、中央部には配石遺構が広がり、その周囲からは掘立柱建物跡が、その南側には土を削平して盛り上げたと考えられている盛土遺構が広がっている。また、縄文時代以降、奈良時代や平安時代にも大規模な集落が広がっており、中世の遺物や城館址に伴う堀跡なども見つかっており、縄文時代以降、歴史時代においても集落の存在が確認されている。

(調査地点)

今回は中央の集住域を南北に縦断するように5地点(北から GSN-1, 2, 3, 4, 5)で調査

を行った(図 2)。



図 1 御所野遺跡の位置

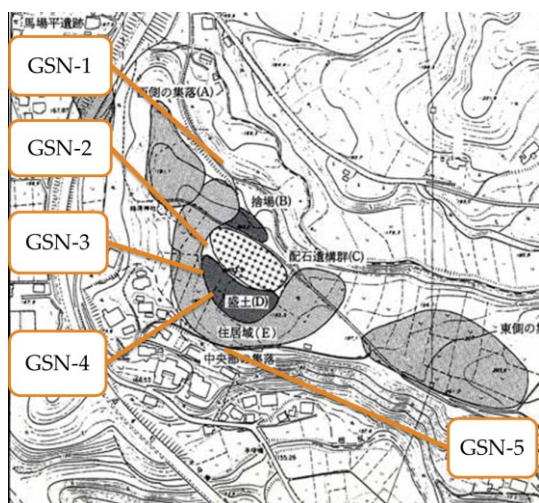


図 2 調査地点

3. 研究の方法

植物珪酸体とは植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したもので、植物が枯れたあとも土壌の構成要素として半永久的に残留している。特にイネ科植物において発達が良く、植物によって形態が異なることから、これらを遺跡土壌などから検出して同定・定量することで古植生・古環境の推定などに応用されている。

植物珪酸体の抽出と定量はガラスビーズ法(藤原, 1976)を用い、同定は400倍の

偏光顕微鏡下で主にイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。

4. 結果と考察

同定された植物珪酸体は次の通りである。

[イネ科]

- ・イネ
- ・キビ連 (キビ・ヒエ・アワ)
- ・ススキ属型 (主にススキ属)
- ・ウシクサ族 (主にチガヤ属)

[イネ科—タケ亜科]

・チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節、チシマザサ節)

- ・ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節)

[イネ科—その他]

・表皮毛起源、棒状珪酸体 (主に結合組織細胞由来)



図 3 代表的な植物珪酸体

(左からイネ, アワ, チマキザサ)

各調査地において植物珪酸体分析を行い、植物珪酸体の層的变化に基づいて植物珪酸体群帯を設定した(図 4)。調査地によって各植物珪酸体群帯の時期が異なることから、場所により土地利用のされ方が異なっていたことがわかる。また、ササは比較的暗い林床でも生育することができ、一方キビ連やススキ属、ウシクサ族は明るく開けた環境下で生育する。こうした植物の生理生態的特性と考古学的知見も踏まえ、御所野遺跡における集落生態系の復原図を図 5, 6 に

示した。

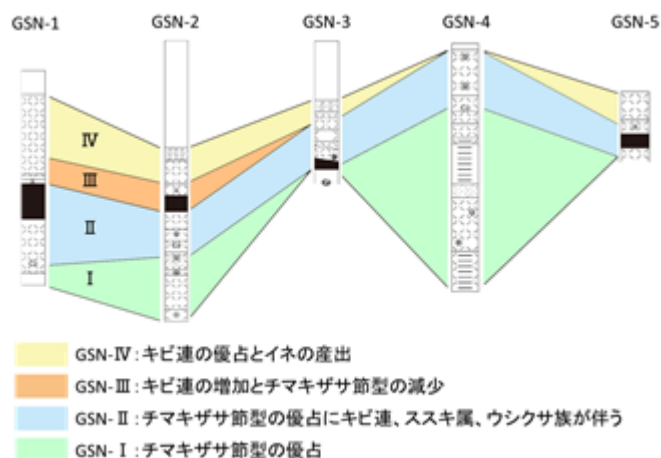


図4 御所野遺跡における植物珪酸体群帯

・縄文時代早期～前期

人々が台地を利用しはじめた時期である。隣接する馬場平遺跡では竪穴住居があらわれる。周辺の花粉分析の結果(松本, 2011 など)から、この周辺でも既にブナの欠落する二次林化がはじまっていたと思われ、台地はクリなどの採取や狩猟の場として利用されていた。徐々に人間の干渉が加わり、ススキやウシクサの混在する疎林景観が広がっていた。

・縄文時代中期

集落が拡大し、中央には祭祀施設である配石遺構や掘立柱建物が建てられた。削平された土は盛り上げられ、大規模な土木工事が行われた。周辺には居住域を含む二次草地が形成され、アワなどの雑穀が生育していた。また、茅場としてススキ原が維持され、ところどころにササが混じった草地景観だったと思われる。周辺には二次林が広がり、人々はクリの採取やシカやイノシシの狩猟を行っていた。

・古代

中央には周溝墓が築かれ、周辺には縄文中期同様に居住域を含んだ二次草地が広がっている。アワやヒエなど、雑穀類の本格的な栽培が行われ、居住域のすぐ側に生育している。その周辺には陸稲が栽培され、同時にコムギやオオムギなども栽培されていた。更に外

側にはススキ原が広がり、アサやベニバナといった植物も栽培されていた。二次林では堅果類の採取や木材資源切り出しの場として利用され、周囲の山林を含め、猟場として利用されていた。

5. まとめ

御所野遺跡において縄文時代以降、人どのように自然に干渉し、空間を利用してきたかが明らかになった。御所野遺跡の土地利用モデルを図7, 8に示す。

御所野遺跡では集落の発展した縄文時代中期以降、祭祀施設を中心とし、周囲に居住域を含む二次草地が広がっていたことが示された。そこには雑穀や陸稲など食用作物の栽培やススキ原やササ原など、茅場や採草目的として利用できる草本類が広がり、その周辺には人工的にクリやトチなどの二次林が植えられ、その集落を自然林が取り囲んでいた。今後、より詳細な生業に関する資料や、空間構造の解明につながる資料が蓄積されることで更に精密な集落生態系が描き出されることが期待される。

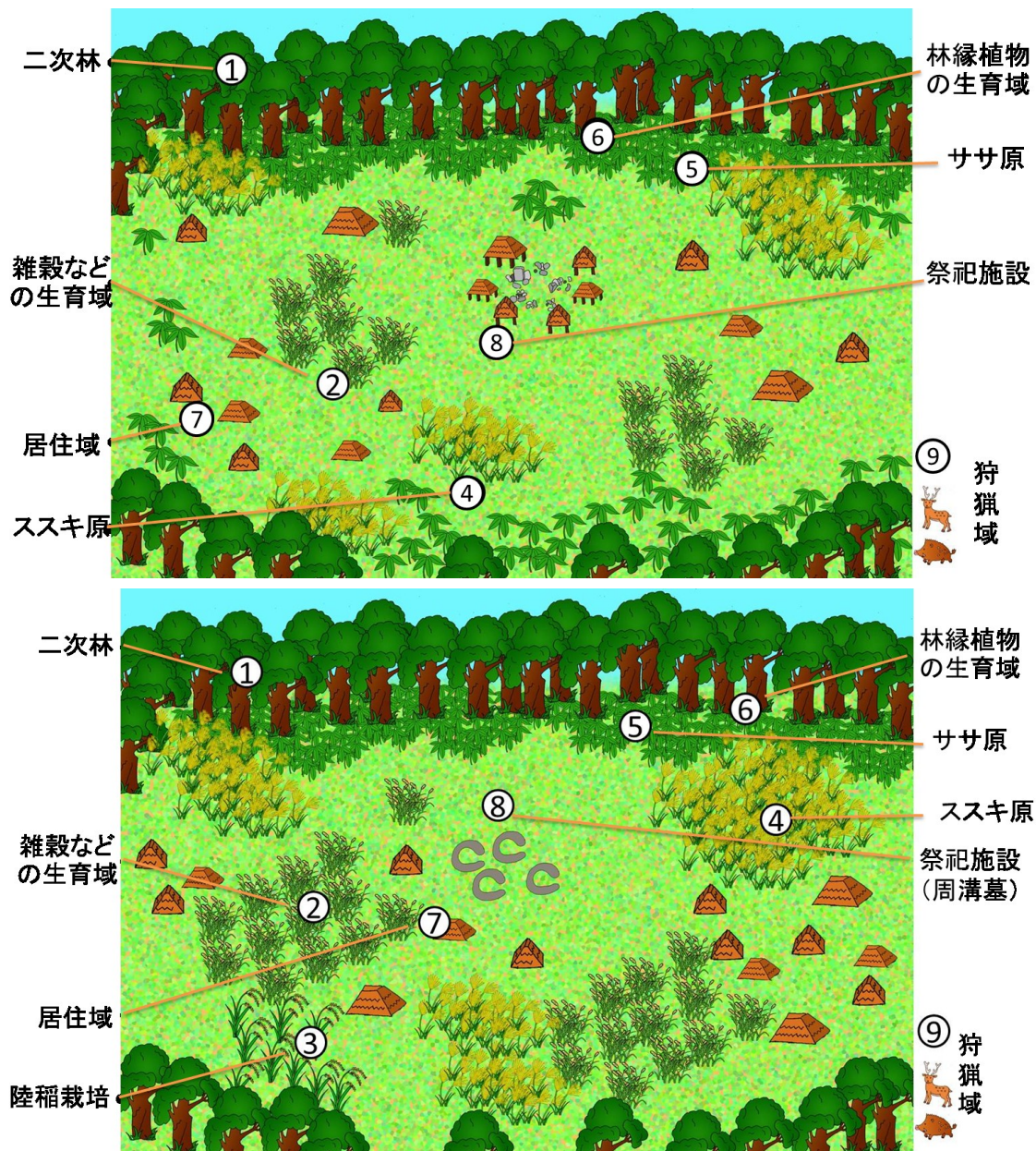


図 5, 6 御所野遺跡の集落生態系復原図（上から縄文時代中期、古代）



図 7, 8 縄文時代以降の御所野遺跡の土地利用モデル（左：縄文時代中期，右：古代）